# 2173再構築3

# エリー

# 小説「ファンレター」について

＜テーマ＞
　愛は距離をこえる。
＜どこが楽園なのか？＞
　保護区と管理区と自由区は、物理的・法律的にわかれている。
　しかし、つながりはある。
　好意と関心を持ちあって、交流している。
　だから、楽園。
＜あらすじ＞
　エリーは、２６歳まで自由区で暮らして、保護区に入る直前に憧れていたアツシと出会って一夜を過ごす。
　そして、予期せぬ妊娠をする。
　妊娠したことを、迷った末に、ファンレターとして書く。
　物語はエリーがアツシに送ったファンレターで綴られていく。
　妊娠が発覚した時、個人として生きることが定着した時代なので、父親を問われることなく、みんなから祝福してもらえる。
　同じ保護区に住む母エミリーの手を借りて、娘サリーを１２歳まで育てる。
　サリーは、工場勤務を経た後、自由区で絵を描いて自由に生きる。
　保護区には戻らない。
　保護区に残されたエリーは、事務限定で入っているので、区長の補佐役を務める。
　天文学が専攻で、占星術やタロットや聖書を独学で勉強して小さいころエリーに教えてくれたボナ先生の跡を継いで村人たちの相談役になる。
　実務的なことは区長が、心の問題は補佐役が相談にのる。
　ボナ先生が高齢のため引退して、エリーが相談役を引き継ぐが、なかなか自信が持てなくてボナ先生に頼ってばかりいる。
　ボナ先生は、教え、諭すように、エリーにいろいろ語ってくれる。
　その内容を、エリーはアツシに書き綴る。
　やがてボナ先生がなくなり、エミリーもなくなり、アツシが歌手引退を発表する。
　引退する前に、共同墓地で葬儀歌手として歌って欲しいと頼んで、再会を果たし、お礼に最後の手紙を書くところで、物語は終わる。
　なぜなら、引退するとファンレターを送る先がなくなるから。

# 死と世界征服

　小学校５年生だったと思う。わたしは布団に入ってぼんやり考えていた。「体育やだな～」と。
　そこでふと思ったわけだ。
　「早く時間が過ぎてしまえばいいのに」というこの「思い」を形にするためには、何をすればいいのか？
　時間が過ぎるということは、死ぬということだから、死ぬのが一番いいという結論に達した。
　それは衝撃的だった。「ああ、わたしいつか死ぬんだ」という発見だった。
　近くの「勝手に登れるビル」から落ちたら死ねるだろうけど、あったかい布団から出たくないし、体育が嫌くらいで死ぬ気になれないし、実行はしなかったけれども。
　「だから、楽しもう」と思うようになった。生きることを選んだ。
-
　しかし、死ぬという事実に対する衝撃は収まらないから、いろいろ考えてみた。
　死んだらどうなるのかには、３パターンある。
　１、無になる。
　２、死後の世界にいく。
　３、生まれ変わって未来を生きる。
-
　１の場合は、無になるだけだから備えておくことはなにもない。
　２の場合は、生きている間は死後のことは分からないのだから、やりようがない。
　３の場合は、「できるだけ自分の好みの世界にしておく」という目的が生まれる。
　必然的に３の場合に備えることになった。
-
　次に何にどう生まれ変わるか分からない以上、どんな状態であってもいいようにしておかなければならない。
　もしかしたら、虫になるかもしれない。そう思うと殺せない。
　何事に対しても、誰に対しても、無関心ではいられない。それはわたしを落ち着かなくさせた。
-
　今は、虫に生まれ変わってティッシュに包まれて殺されてもいいと思うようになったので、殺す。
　しかし、できれば殺したくないなと思う。
-
　わたしはわたしが望む世界を求め、そうなるように行動することを選ぶ。
　これを「世界征服」と呼んでいる。
　権力者になることを意味しているわけではない。

子分気質なので、リーダーは向かない。
結局落ち着いたのは、未来世界を描くというもの。
つまり、「体育やだな」という感情が全ての出発点ということになる。

# 死生観

　作者の考えは、ボナ先生を通じて主人公のエリーに反映される予定。
　ボナ先生は、聖書を学んでいるけど、日本神話をベースとした多神教的世界観を持っている。
　すべてが凝縮した「点」が分化して、同時に違うレベルの「存在」を形成する。
　たとえば、「人間」であると同時に「細胞の集まり」である状態。
　対立を超越した超次元の存在が最初の神なら、分化して異なる性質を分けた神々たちがいる。
　更に分かれて、あるときから人になる。
　神と人はレベルが違うので、人は神になることはできない。しかし、一部を担っている。
　死んだら一である最初の神にかえる。生きている間は、森羅万象の一つを担う。
　繰り返し出てくる言葉だけど、わたしはそんな死生観を持っています。
-
　多神教的な世界には、善悪というものはない。生物的にどうかという生理的な問題があるだけ。
　しかし、いろいろな状態を引き受けなければならない人は、よりよい状態を願う。
　善を求め、悪を退けたいと願う人が多い。
　悪を必要だと肯定し、積極的に活用する間は、善を求めることはできない。
　悪いと悔い改めて、善を求めるようになったら、悪を知っている分だけ間違わず善を求められる。
　意識的に悪を犯していた人は、うっかりとか、気づかずとか、そういう悪を犯しにくくなる。
-
　無機は法則。
　有機は生活もしくは道徳。
　一に帰る世界は、人は神になれると考える。
　森羅万象の一つを担う世界は、神に繋がる系譜を知り、自分の立ち位置を理解するところまでで、同じにはならないと考える。
　つまり、わたしはわたし、あなたはあなた、となる。似ているところもあるが、違うところもある。わかりあえるときもあれば、対立することもあるが、違うからこそ補い合える。与えられた個性を理解し、最大限に生かせば、凡庸は凡庸でなくなる。
　日本的な分化するやおよろずの世界では、一つの理想には縛りにくい。
　しかし、一体化を目指すと、一喜一憂して穏やかではいられない気がする。
　生きている間は違うが、死んだら同じになると考える方が、わたしは安心できる。実際そう信じているようだ。なんとなく漠然とそんな結論を受け入れている。
-
　自分の感覚しか分からないから、それが「普通」だと思う。見聞きして違うものを知れば他の可能性に気づく。そっちの方がよいと思えば真似ることもあるが、たいていは変わらない。それが全てだとおもっていたけど、自分を「特殊」だと思うケースもあることに気づく。

「普通」が子どもの感覚で、「特殊」が思春期なら、エリーは幼児のままの感覚ということだ。
娘に「エリーは幼児っぽい？」と聞いてみた。「ほめてほめてと来るのはそれくらいの子じゃない」と返事が返る。
褒めてもらえると思うのは、「分かってもらえない」と思ってないからなんだろう。
分からないのは、興味がないから。分かっていて答えないのは、意地悪だから。常に相手が原因だと思うから疎外感がない。この人とは合わないとなる。世界から孤立しているとは思わない。みんなと一緒で安心している。
「違う」と思うから上に立ちたいとか、目立ちたいと思うなら、他人の視線を気にできる人になるためには、特殊だと思ってみるところから始めないといけないらしい。漠然と人の目を意識しても結局微笑みあうだけに終わるだけだったから。
「特殊＝これがいいことだ」と思わないと「絶対」という感覚も生まれない。わたしが唯一の神であり、他は偶像にならない。
「わたしたちは１つから分化したもの」と思ったら、「他」がなくなり「全て」が含まれる。
-
エリーは、世界を「存在で埋め尽くされた大きさを持たない点のようなもの」と考えている。
有機も無機も混ざり合っている超高密度なあらゆる状態が同時に存在しうるもの。
そこから細かくなっていく。生き物としての神と、生き物を受け入れるための世界が存在する。
更にどんどん分化していて、神から人に変わる瞬間がある。
人で分化が止まるわけではなく、原子とか素粒子とか、どんどん小さな存在になる。
だから、生物として違うから、人は神にはなれないけど、なる必要もない。
「分化し、分化したもの同士が作用する」という単純な秩序で、点から解き放たれ、線となり、面となり、立体となったものから森羅万象が生まれていく。
そして「一に戻るのは死んだ時で、生きている間は森羅万象の一つを担う」という結論になる。
そうすると、「自分が何を担っているのか？」という問いが生まれる。
目も鼻も口も耳の形などと上げて行ったらどんどん違いが見えてくる。
心のありさままでくわえたら、もっと多様になるだろう。
完全に全部一緒の人はいないという意味で、「ただ一人のわたし」となる。
若いころは、「あんな風になりたい」と憧れて、同じになることを望んで、一生懸命真似した。
それは「同じになった」という喜びと、「わたしの考えを試したいが、一緒にいたいから、共通していることだけ選ぶ」という綱渡り状態の繰り返しだった。
しかし、「虚弱体質はなおらない。同じ行動は無理＝同じになれない」という現実を突き付けられたとき、憧れは絶望に変わった。
違う部分があるから、まったく同じにはならない。初めから無理な願いだったと今なら分かる

。
　「憧れて同じになることをのぞむ」から「違うことをうけ入れる」に変わった時、初めて安心できた。
-
　エリーは何になりたかったのか？
　ＮＯと言える人になりたかった。善悪を知る人になりたかった。でもいつ言えばいいのか分からなくて、反対できる人に憧れた。
　エリーは小心者だから、誰もが認める、家族の世話を焼くとか、お金を稼ぐことがしたい。でも体が思うように動かない。そしてやりたいことで可能な勉強を続けている。結果的に好きなように生きている。選ぶ勇気はなかったのに、周りに支えられている。不思議な力を感じる時がある。
　小心者だから分かることもあるんだなって、勉強していて納得した。無理矢理強くしていくのではなく、怖いことを認めて何故怖いか、何が怖いのか、感じるままに語る勇気を持つ方が役立つ気がする。
　攻撃されることも、主張を曲げずに殺されることも、役に立てないことも怖い。
　だから、現状の否定ではなく、肯定できる楽園を求めるのかも。間違っているとか、悪いことだとか、怖くて言えないから。わたしはこうしたいとつぶやくことしかできない。
　これは嫌いって言えないから、あれは好きって言う。
　女の子的なアピール。
　つまり、ＮＯといえる人にはなれないし、なる必要もない。やっていて辛くないＹＥＳを追求したらいいと今は思う。
　しかし、現状の批判ではないから、前提がない。そこがうまく伝わらない理由かも。
　生物という意味で自然なことをよいと定めただけだ。
　人を１つの宇宙と考えたら、細胞は分裂しているだけなので使命がない。しかし、細胞が集まった心臓には使命がある。自由か従属か。どちらとして生きたいだろう。
　細胞や心臓など、ひとつひとつに意識があったらという話を娘にしたら、そんなガヤガヤしたのは嫌だと言われた。今、心臓に悪いことしたとか、気になるって。
　しかし、突き詰めていくと「生物としてどうか！？」という問いかけなんだと思う。
　生まれて、子ども時代を過ごして、「自由に活躍して」、世話する側になって、世話される側になる。
　大きな流れの中で、「自由に活躍して」だけが特別扱いされすぎではないか？
　「家族や地域のために尽くすこと」と「自分が好きなことをすること」は同時にできない。
　世話をすることは必要なのに、好きなことを究めた方が高収入を得られる。必要なことを真面目にしても、取り残されるだけだ。
　だから、「必要なことをしている人を、好きなことをして成功した人が守る」という発想になった。
　成功者だけに支援を求めることで、好きなことを選んだけど成功しなかった人は自分の身だけ

面倒みればよい。モラトリアムを許される。
-
　地域を守り、人と関わり、生物として求められることを節制しながら守り続けた保護区の人々は、聖なる存在として働けなくなっても守られる。
　自分がしたいことをするかわりに、結果責任をとる自由区の人々は、聖なる人々を守ることで自由に生きる権利を得る。
　自由区で成功すれば、最後まで物質的に恵まれた暮らしができる。
　自由区で失敗すれば、歩き遍路として旅の中で死ぬことになるかもしれない。
　邪魔にする人もいるだろうけど、遍路として生きる人びとを「身代りに業を背負っている」と受け止めて支援する風潮ができるかもしれない。
　現在の「自由にいしていい」けど「老後も保障しなければならない」というシステムは無理だと思うので、「制約を受け入れる代わりに守る」と「制約しないかわりに守らない」に分ける。
　極端な話、自由区では河原に屍があって、坊主が川に死体を流すような風潮が復活するかもしれない。
　自分がその立場になったらどうかと聞かれたらいやだけど、自由を認めるということは、野垂れ死にという結末を受け入れることでもあると考えている。
　迷惑をかけないように、最後まで管理下に置かれないといけないと考えるから、生きるのが苦しいのではないだろうか。
　動けなくなったら、うずくまってひっそり息を引き取る死に方も認めたら、かえって楽になるのではないか。
　子どもは１２歳まで育てたら独立する。
　男だからといって妻子の面倒を見続ける責任がない。
　女にとっても、保護区に入れば男が結婚してくれなくても一人で子どもを自立させる手段がある。
　もちろん、自由区か、保護区で家族として一緒に暮らす生き方もできる。
　保護区と自由区に離れていても、ネットや物質的支援を通して交流することもできる。
　しかし、無理だったり、嫌だったりしたら、家族という関わりを断てる状況があれば選択肢が広がるのではないか。
-
　小説「ファンレター」の世界観を書けるだけ書いたら、そんな感じです。
　「2173再構築」「2173再構築2」で変えたところは、
　　保護区の村を３０人想定にしたこと。
　　保護区に戻れるのは３０歳までにしたこと。
　の二つです。